

「一国の首都」白話語彙考 Vernacular Chinese in “Ikkoku no Shuto”

小田切 文洋

OTAGIRI Fumihito

In this paper, first I survey the reception of Vernacular Chinese in the Edo era Japan, then I examine the concrete example of Rohan Kouda's “Ikkoku no Shuto.” Vernacular Chinese is a vocabulary that was used for popular novels in the Ming Qing dynasties.

江戸時代の思想界に多大な影響を与えた荻生徂徠は、言語論の上でも大きな足跡を残した。よく知られている漢文直読論の主張である。今『訳文筌蹄初編』「序」から、その説くところをまとめてみると、おおよそ次のようになる。日本語の語順にあわせ上下を転倒させて読む訓読のやり方では自分では理解できたつもりでいても、実は見落としている点がいくつかある。例えば、「也・矣・焉」は訓読では不読になってしまっていて、「語脈」や「文勢」に与えるそれら語の働きが分からなくなってしまう。当然のように日本語と中国語は違う。中国語で書かれたものは中国語として理解すべきである。しかし、中国語を学ぶ機会がないときはどうすればよいか。その時は、訓読も利用しながら、部分的には俗語の訳を用いて分かりやすくするようにする。なぜ、俗語かというと、俗語は「人情に近い」ものであるだけに、理解が得やすいからである。従来の訓読に代わるものとして、訳文の役割を積極的に考えていこうというのは、漢文を日本語の延長のようにして考えることを止めることを意味する。中国語として漢文を理解していこうという徂徠のこの考えは、十八世紀を通して学芸の各分野に深く浸透していく。一例を示せば、訳文の学の提唱は、やがて六朝詩や唐詩の俗語訳を生み出していくばかりでなく(江戸の嵩山堂から刊行された一連の『唐詩選画本』^(注1)に、その一般読者層への普及度を見ることができる)、『古今集』の歌を「今の世の俗語」^{サトビゴト}に訳した本居宣長の『古今集遠鏡』にもその遠い反響を見ることができるだろう。

中国語教育のために、荻生徂徠が訳社を結成したこともよく知られていることである。中国語の指導に当たったのは、長崎で内通詞(長崎唐通事の中では一番地位が低い)の経験を持つ岡島冠山であった。訳社のために、岡島冠山は『唐話纂要』などの語学書を次々と著していく。これが中国語熱の気運をもたらし、やがて唐話学(現代中国語学)へと深まっていく。唐通事の間では、中国語の能力を伸ばすために、教材として白話(口語体)で書かれた明清の通俗小説なども読まれていたが^(注2)、この影響もあって、中国語に関心を持つ人々の間で白話小説が熱心に読まれるようになる(元禄享保期に卓越した語学力を持って外交の場で活躍した雨森芳洲も中国語学習に白話で書かれた戯曲や小説が効果的であることを述べている^(注3))。ところで、白話で書かれたこれらの通俗小説は、その表現・内容ともに、それまでの日本語で書かれた小説にはない格段の面白さをもっていた。やがて白話小説そのものの面白さに開眼していく人たちが出てくる。その人たちの手で、白話の解説が進められ、その成果として通俗物と総称される翻訳も試みられるようになる(文言の性格の強い『三国志演義』などは、早くに元禄時代に翻訳されているが、白話で書かれた作品の翻訳が一般的になるのは、1700年代後半に入ってからのことである)。

白話小説のわが国への舶載は、その関心の深まりとともに、1700年代の半ばにかけて増加していくが(大庭脩編「商舶載来書目」『江戸時代における唐船持渡書の研究』『宮内庁書陵部蔵舶載書目』関西大学東西学術研究所参照)、これに刺激されるようにして、読本と呼ばれる新しい小説ジャンルが生まれていく。読本の最初期において最も重要な人物は、小説家の学者といわれた都賀庭鐘である。寛延二年(1749)に出された第一作の『英草紙』は、明末の馮夢龍の手になる話本体小説の「三言」の中から九編を選び出し巧みな翻案をしている。その文体は、新漢語ともいえる白話語彙を積極的に取り込み、しかも漢語類には字音の読みと訓の読みとを自在に施して、和漢混淆の妙を尽くしている。上方に起こりやがて江戸にも広がっていく読本小説は、基本的にこのような文体を基本とする。

ここで白話語彙(近世中国語)について言及すると、日本語の語彙体系の中の漢語としての面とまだ日本語に十分熟していない新来語としての面の二面性をもって、破綻なく文脈にとけ込みながらも日常語とはまた違う文学言語としての役割を果たしていたと考えられる。この白話語彙の使用は、後期読本作者の曲亭馬琴になると質量ともに他を圧するものとなるが、それは馬琴の白話小説理解がいかに本格的なものであったかということを物語るだろう。この白話語彙の使用は、何も読本類にとどまるだけでなく、『兩巴卮言』などの漢文体の洒落本にも多用されている。幕末から明治にかけて流行を見る繁昌記でもまた同

じである。このようにして、日本語の語彙体系の中に一時期は大量に入ってきた白話語彙であるが、現在ではほとんど使われなくなっている。白話語彙は、江戸期をもってほぼその役目を果たしたかというとは実にはそうではなく、例えば坪内逍遙や森鷗外など明治の作家の作品中にも白話語彙が散見するのである。明治期に入っても、『俗語解』を再編した唐話辞書の一つである市川清流の『雅俗漢語訳解』(明治十一年)や、話本小説の原文に評点を施した服部誠一(撫松)の『勸懲繡像奇談』『評点五色石』(明治十六年)の刊行に見るように、中国の通俗小説への関心は持ち続けられていた。明治期のその頃には、北京語を中心とした新しい中国語教育また研究が起こっていたが(江戸時代は南京の官話や福建の方言が使われていた)、江戸以来の流儀で白話小説を読解しようとしたのである。

白話語彙は、欧米語の翻訳作品中の訳語にも散見される。スコットの『ラーマムーアの花嫁』を翻訳した坪内逍遙の『春風情話』などもそうした作品の一つである。最近出た青木稔弘氏の注釈でもその幾つかが指摘されている(注4)。明治の初めに新しい時代を生きる人間像を提示して当時の青年達に大きな感化を与えた、中村正直の『西国立志編』にはおよそ八十語余りの白話語彙を指摘できるが、その一部についてはすでに考察を試みた(注5)。そこで考察したことを略述すれば、従来指摘されてきたロプシャイトの字典(LOBSCHIED'S ENGLISH & GHINESE DICTIONARY(注6))など、19世紀の宣教師達による英華字典類の利用は想定されるとしても、訳語を字典からそのまま引き写したという単純なものではなく、白話語彙も含めて自己の血肉化した語彙の中から訳語として一番最適なものを選び出しているということである。今回は少し視点を変えて、幸田露伴の文章の中から一篇を選び、白話語彙使用の実際を検討してみることにする。漢学の博大な学識を持った露伴のことであるから、その文章中に漢語が多いことは想定されるが、当時俗語とされた白話語彙も、その文章の性格によってはかなり使用していることを確認するためである。

対象とする文章は、明治32年(1899)に書かれた「一国の首都」という今日の都市論を先駆けるものとして高く評価される論文である。『新小説』に二回に分けて掲載された長大な論文で、しかも一気呵成に書かれた文章である。露伴三十三歳の作である。露伴の漢学の学識の深さは周知のことであるが、それが通俗文学にも及んでいたことは、後年になるが『水滸伝』の訳注の仕事からも分かる。露伴の『国訳忠義水滸伝全書』(1922~23年)には、訳注のほかに「解題」が備わるが、その内容は『水滸伝』の源流や版本など多岐にわたる。当時、中国では胡適の「水滸伝考証」が発表され、『水滸伝』研究の口火を切ったが、露伴

の論文はそれを上回り「当時としては、中国・日本をつうじて最高レベルの『水滸伝』研究」という高い評価が専門家によって与えられている(注7)。「一国の首都」中の白話語彙を検討するにあたって、後年のものではあるが、『水滸伝』の訳注の中で、露伴自身も注釈を施しているものを中心にみていくことにする(従って全ての白話語彙にわたっての検討ではない)。その作業の中から、白話語彙への行き届いた露伴の理解が分かってくるだろう。露伴は、『水滸伝』の版本中で百二十回本を最も優れたものとして底本に選んでいる。今、標点本の『一百二十回的水滸』商務印書館を用い、最善本とされる百回本の排印本である、**凌麿・恒鶴・刁寧**校点『容与堂本水滸伝』上海古籍出版社を参照した。

大都の良民は老となく幼となく男となく女となく殆ど悉く破落戸^{ごろつき}の行跡をなし、やがてまた破落戸の心術を学ばんとするに至れり。 p.22

風俗の糜頹を論じた一節である。「破落戸」は、もう一例「遊民及び壯士破落戸無頼漢」(p.56)と見える。「ごろつき」という読み仮名どおりの意味である。『水滸伝』二「一個浮浪破落戸子弟、姓高、排行第二、自小不成家業」(p.14)の一節に付けた露伴の注は、「破落戸子弟は家業を正直に務めぬならずの若者」である。『水滸伝』の語彙研究の走りとなる岡白駒の『水滸全伝訳解』(以下『訳解』と略す)二にも、「破落戸 ナラズモノ○シンダイツブシタモノ」と注していて、およそこの語の語感が分かる。曲亭馬琴の『新編水滸画伝』(『水滸伝』十回までの翻訳)の序に置かれた「職役称呼俗解」にも、「破落戸 うはきものなり、又いたづら者なり。」と見える。この「俗解」は、馬琴語彙の来歴を知る上での好資料となるものである。山東京伝や馬琴など読本中に「破落戸」の用例が散見する。

頹惰自ら甘んじて而して家道興るものはなし、自然に放任して都府いかでか能く繁栄ならん。 p.48

理想郷を実現するには、目的ある運動をしなければならないと論ずる一節である。「家道」は、今普通に使う意味ではない。露伴は注を施していないが、『水滸伝』七に「因為家道消乏、没奈何、将出来売了。」とあり、同じ箇所を『訳解』では、「家道 シンダイ」と注している。読本や洒落本に用例が散見するが、明治期の文献としては、『西国立志編』十三・二十一に、「多年ノ後. 家道大ニ富ミ。」という用例がある。

甚だ柄焉たるが如くしてしかも漠然、その実巴鼻なきの空言に属し… p.57

志すところが定まらぬと空言に終わると論ずる一節である。「巴鼻」は、没~のように否定の副詞を伴い用いられるが、証拠・根拠といったような意味である。『水滸伝』四十五に、「説海閣黎許多事、説得個没巴鼻。」(p.757)と見えるが、露伴は、正確に「と

らへどころ無し」と注する。『訳解』にも、「没巴鼻ハトリ処ナシト云コト也」と見える。なお、「巴鼻」の語義については、語学随筆のような趣のある伊藤東涯の『乗燭談』巻五に詳述されている。

一 霎^{しやうじ}時の雨にも溝は忽ちその排泄^{いとま}の働きを為すに暇^{いとま}あらずして… p.90

悪水排泄の方法の完備を説く一節である。「霎時」は、唐話辞書の一つ『小説字彙』に「霎時 チツトノ間」とあるような意味で使われている。『水滸伝』引首の「霎時新月下長川」に付された露伴の注には、「霎時は短時瞬間といはんが如し」とある。「霎時」は、『雨月物語』をはじめ読本類に用例が散見するほか、明治期の文献中にも、例えば、前述した坪内逍遙『春風情話』一・四に、「霎^{しばし}時野牛の屍をうちまもり茫然として居たりける」のような用例が見出させる。

上野芝その他の公園の悉く浅草公園の如く 嘈^{そうざつふんろうん}雑紛紜たらんことを望むにはあらざれど… p.108

「嘈」は、べちやくちやしやべるという意味である。『水滸伝』二十一に、「口裏只管夾七帯八嘈」(p.320)とある一節に付けた露伴の注は、「何のかのとしやべる」とある。「夾七帯八」は、慣用表現の一つで「夾七夾八」とも言い、いろいろさまざまという意味である。『訳解』二十一にも、「七帯八嘈^{シヤベル} チヤワチヤワシヤベルヲ云」と見える。

神社々内にして不乾淨なるが如きはこれ社司社掌先づその神を無視せるなりといふべく…p.109

神社の森巖神聖を保つべきことを論じた一節である。「乾淨」は、この例のほか7例を数える(p.89・p.90・p.96・p.109にもう1例・p.111・p.112・p.113)。『水滸伝』三に、「哥哥、你是乾淨的人」とある一節に付けた露伴の注は、「きれいな人無罪の人。」である。『水滸伝』の語彙研究として現代においてもなお高い水準を持つ陶山南濤の『忠義水滸伝解』(以下『解』と略す)でも、「乾淨^{カンギンテジン}的人 潔白ナル人ノコト」と注する。きれいなというのがこの語の基本となる意味であるが、潔白なという意味合いも含めて使われている例である。

恐らくは後世強人出で、神社を駆逐し、社地を押領するの議を発するに至るの階^{きざはし}とならん。 p.109

「強人」は、白話語彙としての用法で、唐話辞書の一つ『俗語解』に「強徒 ヌス人強人」とある意味で用いられている。『水滸伝』二「如今近日上面添了一夥強人」(p.31)とある一節に、露伴は、「一夥強人、一群強盜」と正確に注している。『解』二にも、「一夥強人^{イホウキヤンジン} 一組一ムレノ強盜也」とある。山東京伝の『忠臣水滸伝』前・三などに用例が見られる。

実に繁華熱鬧なる都府、若くは交通往来の衝に当れる港湾において… p.132

「熱鬧」は、もう一例「市中も熱鬧喧雜甚しからずして」(p.175)とある。『水滸伝』五に「夜間如若外面熱鬧」(p. 84)とあるが、露伴の注はない。同じ箇所を、『訳解』五では、
サハガハ「熱鬧 ヤカマシク」と注する。「熱鬧」は読本中に散見し、明治期の文献でも、例えば鷗外の『即興詩人』「旅の貴婦人」に「あらゆる外国人の打ち雑りて、且叫び且走る、その熱鬧雜踏の状、げに南国中の南国は是なるべし。」とあり、かなり広く使用されている。

娼妓のじょうらんこわく嬈亂ろうしひようかく蠱惑を能くして浪子嫖客を翻弄せし時代に当つて… p. 135

「浪子」は、『水滸伝』二十四に用例があるが、露伴訳では省かれている。前掲の『俗語解』に「浪子 ウハキモノ」とあるような意味の語である。「嫖客」の方は、もう1例(p. 147)ある。明代の類書で、俗語を多く収める『古今類書纂要』卷之七に「嫖客 言人輕身于花柳之中妒物之嫖流而無定也」とあるのが、その意味になる。我が国の唐話辞書類では、伊藤東涯の『名物六帖 人品箋』「無頼頑凶」にはケイセイカヒ「飄客」とあり、『小説字彙』にも「嫖客 ダイジン」とある。妓院の生活を描いた『九尾亀』などの清代の白話小説に用例が見えるが、読本中にも用例が散見する。

以上、少ない用例からではあるが、雅俗多彩な語を使い分けながら、一気呵成に書き下ろしていった露伴の筆勢の一端が分かるであろう。そうした奔放自在ともいえる語の運用の中で、白話語彙もそのところを得て効果的に使われているのである。

注

- (1) 「春眠不觉晓」でよく知られている孟浩然の「春晓」の訳文を参考までに上げると、「はるはよくねむるものゆへあかつもしらすねすこしほうほうてなくとりのこゑてめをさましておもへはさくやはあめや風か有たかさためて花かいかい事しつたてあろふ」となる。
- (2) 六角恒廣『中国語教育史の研究』東方書店 1988年 pp. 386-38
- (3) 「伝奇即嘴上話。学唐話者朝夕誦習可也。若要做文字。当由小説。此亦不可廢也。」『橋窓茶話』中巻
- (4) 『坪内逍遥 二葉亭四迷集』（新日本古典文学大系明治編 18）岩波書店 2002年
脚注で指摘されているのは、「什麼」「只顧」「只得」「霎時」「東西」「造化」であるが、この他にも「半响」「^{そのとき}當時」「^{そのとき}登時」「吩咐」「管待」「推辞」「忽地」「看官」「^{むとせばかり}六十可」「立地」「驀地」「恁」「跄々踉々」「勸解」「適纔」「隨即」「相公」「要緊」「照驗人」「遮莫」が白話語彙の例として挙げられる。
- (5) 拙稿「『西國立志編』の漢語の性格について」『解釈』584・585号 2003年 また、木村秀次「『西國立志編』白話語彙考」「『西國立志編』白話語彙考(二)」『千葉大学教育学部研究紀要』第50・51巻 2002・03年も参照。
- (6) 中村正直が、同字書を英漢和辞書として再編成する作業に参加していることについては、高橋俊昭「中村敬字と英語辞書」『英語史研究』第24号 1991年を参照。なお、東京美華書院から同字典の初版本の複製が出ている。
- (7) 高島俊男『水滸伝と日本人 江戸から昭和まで』大修館書店 1991年 p. 330

参考文献

拙稿『平成 14～15 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書Ⅱ』(白話語彙用例辞典)2004年

胡竹安『水滸詞典』漢語大詞典出版社1989年

石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』清水弘文堂 1967年

『幸田露伴全集』(第三十卷～三十七卷)岩波書店1955～56年

幸田露伴『一国の首都 他一篇』岩波文庫1993年

香坂順一主幹『中国語大辞典』角川書店1994年

香坂順一『白話語彙の研究』光生館1983年

羅竹風主編『漢語大詞典』(全12卷)漢語大詞典出版社1986年

岡白駒『水滸全傳譯解』『唐話辞書類集 第十三集』汲古書院1973年

大島吉郎編『容輿堂本『水滸伝』語彙索引』近代漢語研究会1998年

陶山南濤『忠義水滸傳解』『唐話辞書類集 第三集』汲古書院1970年

戸川芳郎・神田信夫編『荻生徂徠全集 2 言語篇』みすず書房1974年

許少峰主編『近代漢語詞典』團結出版社1997年